

切腹で終わった「二つの事件」

増山雄三

JR元町駅を降りて南に暫く歩き、旧居留にある神戸市立博物館に行く途中、大丸神戸店のはす向かいの一角に、「三宮神社」があるが、その境内には、当時の大砲と共に「史跡 神戸事件発生地」の石碑が建っている。

この神戸事件の発端は、慶応四年（一八六八年）二月四日、神戸三宮神社前で備前藩の隊列を横切った、フランス人水兵を斬り付け負傷させたあと銃撃戦に発展し、居留地予定地を検分中の、欧米諸国公使らにも射撃を加え、明治政府初の外交問題となった。

折しも、その一週間前に戊辰戦争が始まっていた、明治政府は、徳川方の尼崎藩を牽制するため、備前藩に対し摂津西宮の警備を命じたので、備前藩は家老の日置帯刀率いる八百人が、大砲を伴い西国街道を進んだ。

二月四日十三時過ぎ、備前藩兵の隊列が三宮神社近くに差しかけた時、付近の建物から出てきたフランス水兵二人が、行列を横切ろうとしたので、この無礼な行為をみた第三砲兵隊長の「滝善三郎」が、槍を持って制止に入ったが言葉が通じず、水兵たちを槍で突きかかり、刺し傷を負わせたのである。

その時、自らも現場に居合わせた、フランス公使のロツシユは激怒し、兵庫開港を祝つて集結していた列強艦船に緊急事態を発し、米英仏三国の水兵が備前藩兵を居留地外に追撃し、生田川河原で撃ち合いとなったが、備前藩の日置が射撃を止め撤退したので、死者もなく負傷者も殆どなく、事なきをえた。

その四日後、明治政府と列強諸国との間で交渉に入ったが、日本在留外国人の安全を保障し、当該事件の日本側責任者の嚴重処罰を要求する彼らの強い要求に政府は抗えず、三月二日、永福寺において列強外交官列席のもと、滝を切腹させると同時に、備前藩部隊を

率いた日置を謹慎処分に処し、この事件は一
応の決着を見たが、永福寺には、滝が切腹す
る様子の絵図が残っている。
一方、三十二才で世を去った滝を顕彰する
碑が、三宮神社から南西に三キほど離れた能
福寺にあるが、そこには「発足後最初の外交
問題で苦境に立たされた明治新政府を救い、
日本が外国に植民地化されるのを未然に防い
だ」と記されているものの、忠義を尽し、日
本の将来の礎になった滝は、一体どのよう
に思っていたのだろうか。
こうして神戸事件は、滝善三郎という一人
の命を代償として解決する形になったが、そ
れ以降、発足して間もない明治政府が、対外
政策にあたる、正統な政府であるという事を
諸外国に示すと共に、それまでの「攘夷」政
策を「開国和親」へと、一気に方針転換させ
た事件でもあった。
ただ、この開国和親表明は、列強外交団に
対するものであり、新政府内にも未だ攘夷を

支持する者もいた事から、国内に対してはその事実を明確にしなかった。それは、この問題の行方によっては、かつての薩英戦争同様の事態に進展する可能性もあり、さらに、神戸が香港の九龍や上海の様に、理不尽な植民地支配下に置かれる事態も起こりえた事もあって、滝の犠牲によってこのような危機回避がなされたのは、日本史の流れにおいても重要な出来事であった。そんな神戸事件のホトボリが冷めない、それから十一日後の二月十五日明け方、測量の名目で二人のフランス人が、陸路で大阪湾にある堺へやってきたので、それを怪しんだ、この地の警護を担っていた土佐藩の、箕浦と西村率いる警護隊は、政府から何の連絡もなかった事もあり、二人を追い返した。だが、夕方になると、前に来た二人を迎えに来ようと、今度は十数名のフランス人水兵が船から上陸してきたので、土佐藩は前月、土佐藩士の本山茂任が、土佐藩へ運ぶ途中だ

った「錦の御旗」を、一時的だが仏兵に奪われるという、前代未聞の「錦旗紛失事件」を起こし、警戒心を高めていた所だった。

そこで、警護していた土佐藩士が、彼らに船に戻るよう命じるが、言葉が通じなかったようなので威嚇射撃をすると、それに驚いた水兵たちは、慌てて逃げ惑い海で浮き沈みするうち、多数の銃弾が撃ち込まれた。

その結果、フランス側の死者は十一人に達し、多くの土佐藩士が罪に問はれる外交問題となり、幕府の後ろ楯になっていたフランス公使のロッシュは、新政府の出現で面目を失っていた事もあり、事件を起こした土佐藩に對し、極めて強硬な姿勢をとったのである。

その内容は、「堺での処刑」と「十五万^{ドル}の賠償金支払」、それに「藩士の開港場への立ち入り禁止」などを突きつけ、一步も譲らなかつたので、新政府の外国事務局判事をしていた五代友厚らが奔走するも、最終的に、土佐藩六番隊長の箕浦猪之助と八番隊長の西

村佐平次、それに補佐役の二人と足軽十六人の、合計二十人の切腹が決まってしまった。だが、土佐藩の取調べに対し、「隊旗を奪うなど無礼を働き、隙を見て逃亡しようとしたので銃撃した」とそのきっかけを供述したのを、フランス側は認めなかったので、土佐藩は止むを得ず、発砲したと名乗り出た二十五人の中から、切腹する者を「くじ引き」によつて決めたのである。

このような決着を図った背景には、発足間もない新政府としては、幕府を倒すのが最優先だった事もあり、そんな時外国とのもめ事は得策でなかったので、早急な幕引きをしようとして、藩士が犠牲になったと思はれる。

事件の発生から一月後の三月十五日、堺の名刹「妙国寺」の境内で切腹した箕浦は、切つた腹から自らの内臓を掴みだし、立会人の仏人に投げつけ、この恐ろしい光景は更に続き、十一人目が腹を切ると、仏側はそれに堪え切れなくなつて、やむなく、切腹を中止す

るよう伝え、残る九名は切腹せぬ様にと、助命を願い出たのである。

なぜ、このような多くの血が流されねばならなかったのかについて、妙国寺の岡部日聡貫主は、「それはきっと、言葉の壁に尽きるだろう。意思疎通さえできていれば、こんな悲劇は起こらなかったろうに」と、その経緯について悔やんだように話す。

かつて、私が通っていた堺市の大阪府立三国ヶ丘高校は、近くに仁徳や反正天皇の御陵がある古墳の町にあったが、少し南にいくと妙国寺があつて、そこには、二月十五に起つた「堺事件」で切腹した土佐藩士と、堺港にやってきて射殺されたフランス水兵の、双方を弔う数基の碑が仲良く建てられている。

かくして相次いで起つた、フランス人か絡んだ二つの事件は、日本古来の「切腹」という形で終わったが、それは、外国人に対する日本人を、深く印象付けるものとなった。

令和二年八月